

何も知らない大学教授が 病院長になってしまった日

小川 修

大津赤十字病院院長／京都大学名誉教授



全ての始まり

新型コロナウイルス感染症発生から半年が経過し、第2波によって京都大学医学部も附属病院も大混乱となっていた2020年夏のある日、医学生時代の同級生で附属病院の病院長をしていたM教授から呼び出しがありました。「先生、来年の春から大津日赤に院長として着任してくれへん？ 泌尿器科学会総会のお世話も終わったし、もうやり残したこともないやろ」と打診を受けました。それが全ての始まりでした。当時、私は大学教授（専門は泌尿器科学）としての定年まで2年あったので、ちょっと戸惑いましたが、恩師でもある先代の教授からは「もし次の役職で良いところがあったら、定年にこだわらず若いうちにチャレンジした方がいいよ」と助言を受けていました。また、教授職も20年以上務めさせてもらったので幾分マンネリ化していて、次を担う若い世代に老害となって迷惑をかけるのもいやでしたので「喜んで行かせてもらいます」と即答しました。唯一の問題は家内の説得でしたが、大津赤十字病院（672床）は自宅から通勤可能なので、わりとすんなり受け入れてくれました。

何も知らない病院長が考えたこと

院長職を引き受けてはみたものの、大学病院では副

院長（それも「教育・研究担当」）として3年間執行部にいたのみでしたので、病院長がすべき仕事については何も知りませんでした。院長職の何たるかを知るためには、やはり先達に聞くのが一番です。すでに病院長職に就いておられた数人の先輩に「病院長って何をすればいいんですか？」と聞いてみました。するとほとんどの先生が「良い副病院長、事務部長、看護部長を選んで、あとは何もしないこと。病院長が忙しい病院は良くないよ」と言われるのです。何のアドバイスにもなっていませんでしたが、「何も知らない病院長が院内の細かいことに口を出すとろくなことにはならない」ということだろうと解釈しました。

それでも何もしないわけにはいかないので、自分が20年前に「何も知らない臨床医が大学教授になった日」のことを思い出してみました。当時、何をしたかという、教育、臨床、研究における大きな目標をたてて教室員や同門会の先生方にことあるごとに念仏のように唱え続けました。院長職でもこの作戦でいこうと決めました。

何も知らない病院長がしたこと

私の両親は学校の教員でした。その影響からか、私も教育には興味があり、教育の重要性も認識していました。教授になった時の念仏のひとつは「泌尿器科プ

「プロフェッショナルの育成」でした。それにならって、就任時に職員の皆さんに最初をお願いしたことは、「全職種で心優しい医療のプロフェッショナルを目指しましょう」ということでした。赤十字の基本理念は「人道と博愛」です。日頃あまり見聞きしない言葉ですが、私なりに勝手に解釈すると「人に対する優しさ」ではないかと思います。患者さんのみならず、家族、同僚、そして全ての人に対して心優しい医療のプロを目指してほしいと思っています。2つ目は「全職員が笑顔で生き生きと働ける病院にする」。3つ目は「地域の皆さん、診療所の先生方に信頼される病院であり続ける」ということにしました。この3つを今でも念仏のように唱え続けています。

もう1つ、院長権限を使って、医師用のロゴ入り白衣を作りました(写真)。京都大学の教授に着任する前、秋田大学で助教授として働いていた時のエピソードです。当時の教授に「小川君、もう少し礼儀正しい身なりで患者さんに接しなさい。三つ星レストランで食事をするときに、汚い身なりのシェフが出てきたら良い気分はしないだろ」と注意を受けました。確かにその当時はしわくちやの白衣で、ボタンも留めず、ポケットに手を突っ込んで闊歩していたと思います。それ以来、病院での身だしなみには気をつけています。大津赤十字病院には三つ星レストラン(病院)になってほしいので、医師全員にロゴ入り(副部長以上はネーム入り)の白衣を強制的に配りました。最初は、私しか着ない白衣になってしまうかもと不安に思っていたのですが、3年経った今では、ほぼ全員の医師が着用してくれています。ちなみに、ブルーの円が琵琶湖を象徴



しているこのロゴは、私の家内が原案を作ってくれました。

今でも何も知らない病院長の現在と今後

病院長に就任して以来、新型コロナウイルス感染症に悩まされ続けましたが、幸い、優秀な副病院長、事務部長、看護部長に恵まれ、今でも「何も知らない病院長」のままです。病院長の定年退職まで4年を切りましたが、残りの期間も3つの念仏は唱え続けるつもりです。今、急性期病院はコロナの影響、医師の働き方改革、診療報酬の改定を受けて、どこも経営が厳しい状況が続いています。何も知らない病院長だからこそできることは、悩みを抱えず脳天気であることかもしれないかもしれません。前向きに明るく職員を引っ張っていきたいと思っています。